

ウエイズミルズから 日本橋へ

さいとう 齋藤 智
さいとう 齋藤 智

(彫刻家、王室カナダ芸術院会員・昭36経)



湖、放牧地、森、川、緩やかな丘陵が広がるカナダ・ケベック東部の小さな村ウエイズミルズを見下ろす農場に家内と暮らしております。ここに居を構え、夏は夕食後に畑や鶏の世話をし、冬は雪に埋

まる。こんな私達風の暮らしをすることが、作品の半分近くを創造したに等しい、と言えるかもしれません。私を取り巻く自然は見る度に色々な顔を見せてくれます。それが四十年余の制作に欠くことのできない大事な要素になっています。

セントローレンス河下流北岸の山奥や、近くの花崗岩の原石を採る山に立つと、古くて新しい石に出合います。その美しさに打たれていると、時間の觀念が長くなり、寄せては返す波のような時代の流行は遠い生活になります。

一昨年日本橋三井タワーのアトリウムに設置された石彫『はる』は、このような

環境の中で制作されました。高さ四・三mと三・七mの花崗岩でできた一対の作品で、未来に向かって開くと共に、ダイナミックなものを表しています。

二体の彫刻の間に行ける空間が三つ目の彫刻となり、全体を曖昧でなく示唆に富むものになっています。たっぷりした重量感を持ち、天空に舞い上がって自由に飛んで行く。耐久力が感じられ、しかも生き生きとして、多様であり、見る角度によつて変化する。書であり、踊りであり、自由である。石が美しいメヌエットを踊るとは誰も思わないでしょう。経験と伝統の重さをもつとも即興的な書や強烈なステップの礎となつて居るのです。

この仕事に携つた五年間、深い感銘を覚えたのは、途切れることなき伝統の連続性でした。伝統の豊かさは、無限の『生命の飛躍』(Alan Vital)に基づく

の思いを強くしました。私が作りたいと思つたのは、沸きあがる強い意志を持つた、生命の原動力ともいうべきものを呼び起こす彫刻です。昔の江戸から今の自分の世界へ、東京の中心にありながら人々がそこへ帰っていきたいと思えるような公共の場所へ人々を誘う彫刻です。

作品名『はる』は、光を表すとともに、草木の芽が張る、膨らむ、畑を開墾する、万物が生成する、発生する、若返る、そして自由であることにつながります。地中から上に向かう力強いムーヴマンです。

現在において、過去と無限が一つになったものを表現すること、一口に言えば、生の源に存在する美を探るのが私の仕事なのです。

ウエイズミルズに暮らす私にとつて春は喜びの泉であり、急に緑になった放牧地に生まれたばかりの子牛が駆け回るのを見ると可笑しさがこみ上げます。気がつくとも、また種がちらりと芽を顕している。氷に覆われていた川が勢いよく流れ、音も変わる。日がどんどん長くなる。

『はる』のフォーーム、そのヴォリュームとリズムは私の生きる『時間』と、ウエイズミルズの生活に根づくものです。